

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：14503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653293

研究課題名(和文)教育学部美術科における領域横断的授業「具象表現」の構想 絵画・彫塑領域から

研究課題名(英文) A conception of lesson subject Concreteness Expression in the department of fine-arts course of university of education &#8211; from the viewpoint of painting and sculpture &#8211;

研究代表者

前芝 武史 (Takeshi, MAESHIBA)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：50403308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：現代の美術の多様化には目を見張るが、一方で美術とは何か、また図工科・美術科教育は一体何を教えているのかといった議論が昨今非常に多くなってきた。我々は教員養成大学美術コースで美術を通し、何を学ばせ、どんな力をつけさせたいのか。本研究では絵画・彫塑の双方の領域にまたがり、美術史の中でも特に長い歴史のある具象的表現を主題とした授業科目の構想を試み、その実技内容、指導、教育的意義等を考察し、その基礎的事項を浮き彫りにした。具象表現は絵画・彫塑の両領域に共通して存在するが本研究では、それぞれの領域を専門とする教員が連携し、現在まで曖昧であった両領域の共通項や、美術教育における具象の今日的意義を考察した。

研究成果の概要(英文)：I think that spread of present-day fine-arts expression is wonderful. However, in one side, the argument about fine-arts education has increased these days. What do we want to make studied at the fine-arts course of university of education? On this research, we tried construction of the lesson subject on the theme of concrete expression. And we showed the contents of practical skill, educational meaning, and the basic matters. Concrete expression exists in both the domains of painting and sculpture. Therefore, on this research, the researchers of each technical field cooperated and considered the similarity of both domains the contemporary meanings of the concreteness expression in fine-arts education.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：美術科教育

キーワード：教育内容 教育方法 美術教育の意義 教科内容学 本質と可能性 領域横断的 絵画 彫塑

1. 研究開始当初の背景

現代における美術の表現方法や内容は実に多様化を極め、その広がりや変容は目を見張るものがある。それに伴い美術教育の認識もまた多面化し、次々に新たな価値観が見出されていく。

しかし一方で表現の自由や個人の感覚的側面が強調され過ぎた面もあったため、表現を支える造形力重視の考えは後退しつつあり、実際に図工や美術に苦手意識をもつ子どもが増えてきたこととともに、美術とは何か、また図画工作科・美術科教育は何を教えているのかといった議論がなされることが昨今非常に多くなってきた。

また学校教育における図工・美術は存続の危機に瀕している他、混沌とした状況もよく見られ、教育大美術コースもその煽りで困難な状況に面する機会が増加しつつある。この教科は、児童生徒の障害の有無を問わずそれぞれの個性に働きかけることのできる魅力的なものでもあるが、美術を通し我々は何を学ばせ、どんな力をつけさせたいのか。そこで本科学研究では、絵画・彫塑の双方の領域にまたがり、美術史の中でも特に長い歴史のある具象的な表現をテーマとした授業科目の構想を試み、その指導内容、教育的意義等を今一度考察し、その基礎的事項を見出したいと考えた。

そもそもこの具象表現は、絵画・彫塑の両領域に共通して存在するが、美術、図工・美術科教育にかかる研究は、それぞれの領域の専門家がいわば分業的にこれを行い、専門外の研究の内容や現状は把握され難い側面がある。大学における専門の壁は厚く、指導までのこととなれば一層である。しかし本研究では、それぞれの領域を専門とする教員が連携した形でこれを進め、現在まで曖昧であった両領域の共通項や相違点を明確にして行きたいと考える。そしてこうした授業科目を実験的に構想・実践・考究することにより、これらを体系的に見つめ直す一つの重要な機会としたいと考えた。

現在のところ、具象表現という事柄をテーマとした教育大学系教育論文は全く存在せず、また取り分け彫塑分野においては、全般において研究論文自体が非常に少ないのが現状であり、彫塑教育分野について言えば、言葉としてまずは起こしていく段階から始める必要があるといった状況である。

2. 研究の目的

我々、教員養成大学美術コース教員はここで美術を通し、何を学ばせ、どんな力をつけさせたいのか。本研究では絵画・彫塑の双方の領域にまたがり、美術史の中でも特に長い歴史のある具象的表現を主題とした授業科目の構想を試み、その実技内容、指導、教育的意義等を考察し、その基礎的事項を浮き彫りにしていくというものである。本研究では、現在まで曖昧であった両領域の共通項や、美術教育における具象の今日的意義を考察していく。

本研究では、主に人体をテーマ(モチーフ)とした領域横断的な授業科目として「具象表現」を構想・実施し、その有効性を検証するものである。具象表現の今日的意義を浮き彫りにするとともに、授業においては、平面的な(絵画領域)アプローチと立体的な(彫塑領域)アプローチとを、統一的・融合的に行うことにより、総合的な造形表現力の効果的な形成を図ろうと考えている。

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのかについては、以下に記す1.~4.の内容である。

1. 「具象表現」の授業の構成内容(大枠)
2. 「具象表現」の授業の各単元
3. 各単元の目的・位置づけ・教育的意味・教育的可能性、単元どうしの関連
4. 授業の有効性の検証(各単元から授業全体まで検証を行う。またプレテスト/ポストテスト・発話分析・学生の作品分析等からそれぞれの有効性を客観的に評価する。)

3. 研究の方法

研究方法は、絵画・彫塑・美術科教育等それぞれの領域を専門とする教員が連携し、文献調査、実験授業の構想・検討並びに実践・多角的検証(授業評価・映像分析等含む)を行うというものである。3年にわたる研究であるが、以下にその内容を記す。

平成23年度(初年度)
初年度は「具象表現」の計画・構想を練った。その内容は以下のように進めた。

資料収集

- a. 文献の収集・文献による調査
- b. プレ実験の実施

授業構想

1年の前半に、後半に を行った。担当については、とも初田・前芝・浅海が関わる(の一部、絵画領域は初田、彫塑領域は前芝、相互にかかわる部分の授業コーディネーターは浅海)。b.ではプレ実験被験者を「研究協力者A群」(註)として雇用した。

- b.ではプレ実験被験者5人に制作を行

わせ、データ/問題点等の収集・分析を行った。実験回数は15回。

の授業構想は、絵画領域からの検討(初田担当)・彫塑領域からの検討(前芝担当)・共通領域(初田・前芝・浅海)という形で行った。

の授業構想では「具象表現」の内容に係る、実技の咀嚼・分割を行う。ここでは前に述べた3つの観点群からこれを行った。授業づくりにあたっては、初田・前芝がこれまでにそれぞれ行ってきた教育研究及びこれまでの両者の共同研究を基礎に据えつつ、a、bを踏まえた形で進めていった。

平成24年度以降

平成24年度には「具象表現」実験授業の実践を行った。その内容並びに方法は以下のようである。

プレテスト、アンケート実施
授業実践(後のプロトコル分析のため、実験内容はビデオに記録した)
ポストテスト、アンケート実施
の手順で進めた。

、プレテスト・ポストテストは、学生の学習効果を見るためのものであるため、同一の難易度のもを課した。その際、比較的短期間で行うことが出来るよう配慮を行った。プレテスト・ポストテスト・アンケートは絵画領域(初田担当)・彫塑領域(前芝担当)それぞれ別個に行った。

授業実践は、授業形式(毎週180分、全15回)で行った。

授業実践は絵画領域(初田 主担当) 彫塑領域(前芝 主担当) 複合領域(初田・前芝・浅海担当)の3部構成で行った。

授業実践では、「研究協力者B群」(註)として被験者約10人(絵画5人・彫塑5人)、「研究協力者C群」(註)として実験協力者2人を雇用した。ビデオ記録担当に、研究協力者C群を雇用し、3人の教員で授業後の分析を行った。

なお、「具象表現」の授業評価は、以下のように進めた。

データ分析
a. 作品分析
b. プレテスト・ポストテスト、アンケートの比較・分析
c. プロトコル分析
妥当性・課題点の検証
研究成果のまとめ
の手順で進めた。

作品分析・プレテスト・ポストテスト・アンケートの比較分析は絵画領域(初田 主担当)・彫塑領域(前芝 主担当)それぞれの領域で行う。なお、統合領域については、初田・前芝・浅海が共同で分析を行った。

では「研究協力者D群」(註)として、資料整理補助2人を雇用した。

は初田・前芝・浅海が協同的に担当した。

研究成果は期間内に学会誌投稿論文として大学美術教育学会誌に2編が掲載された。

なお、具象表現の授業の中身は以下のよう構成した。

トレーニング 塊の構築
トレーニング 把握
記憶と再現
都市を作る・描く
人体の美と構造
講義「具象表現」について
絵画・彫塑 具象表現実技

では、彫塑造形も紙面で行うデッサンも本質は塊の構築にあるという共通性に着目し、紙面デッサンから彫刻へ、またその逆へこの本質が往還的に学べるような授業を考案・実践した。

では、物体の寸法・位置・方向・断面の形状把握や、バランス感覚の強化等の能力向上のトレーニングを考案し、これに基づいた授業を考案・実践した。

では、特に以後継続する研究のことも考慮しつつ、描写・再現と記憶の関わりをテーマとした、データ採取を目論んだ実験的授業を行った。

では、彫塑芸術の姉妹芸術とされる建築や環境デザインなどといった領域の初歩的な学習を含ませ、討議を交えつつ、諸々の塊を操作して箱庭で都市構想させ、その内容をデッサンをさせるという授業を考案・実践した。

では、人体の骨格標本と粘土を用い、モデリングの基づいた手法により構造を見て構成するというテーマで美術解剖学の授業を考案・実践した。とりわけそのような中で、人体の構造的な美や作品をどのように構成していくかその手順を考えさせるような事柄を重点的に扱った。

では、パラゴーネ論争をはじめとする諸芸術の比較論争に着目し、絵画・彫塑の本質論について講義を行った他、絵画・彫刻をはじめとする造形芸術の歴史的変遷や多様性、そして人間の成長や現代の教育的課題等と照合した内容の講義を絵画・彫塑の各領域から行った。

では、人物モデル(裸婦)を借り、絵画と彫塑の相互補完性に注目させ、これら双方の制作に取り組ませ、その共通事項や特性、更には具象表現というものについて自己の表現とともに考えさせる授業を構想・実践した。

(註)研究協力者 A~D群について
研究協力者A群:兵庫教育大学学校教育学部美術コース3、4回生(5人)
期間:平成23年度
役割:被験者(プレ実験)
研究協力者B群:兵庫教育大学学校教育学部美術コース3、4回生(絵画5人、彫塑5人)
期間:平成24年度

- 役割：被験者（実験授業）
 研究協力者C群：同大学大学院修士課程学校教育研究科美術コース1、2回生（2人）
 期間：平成24年度
 役割：実験補助（特にビデオ記録等） 雑務一般
 研究協力者D群：同大学大学院修士課程学校教育研究科美術コース1、2回生（2人）
 期間：平成25年度
 役割：実験補助（特に資料整理補助） 雑務一般

4. 研究成果

本研究では絵画・彫塑の双方の領域にまたがり、美術史の中でも特に長い歴史のある具象的表現を主題とした授業科目の構想を試み、その実技内容、指導、教育的意義等を考察し、その基礎的事項を浮き彫りにした。具象表現は絵画・彫塑の両領域に共通して存在するが本研究では、それぞれの領域を専門とする教員が連携し、現在まで曖昧であった両領域の共通項や、美術教育における具象の今日的意義を考察した。本研究を通して明確になった事柄の概略を以下に記す。

- ・絵画・彫塑とも、具象表現は、万物の仕組みを観察し、その構造を多面的に把握、そして自らの作品や制作手順といった設計を考えるとといったことから始まるということ。
- ・絵画・彫塑とも、表現における自由や可能性を見る一方、造形上の秩序や原理・法則を知り、感覚や造形的な思考を働かせてこれを行うということ。
- ・絵画・彫塑とも、巨視的/微視的に観察・分析・思考したり、構造/体系/関係で見たり捉えたりすること、或いは、多面的に見たり、多角的に考えたり、あるいは時として視点を変えて事象や自らの作品を見ていくということ。
- ・絵画・彫塑といった純粋芸術の場合、自らの主観や直観の問題が常に取りざたされるが、客観的なものの見方だけでなく、客観と主観・直観を往還したり、整理をつけていたりする必要があるということ。
- ・絵画・彫塑とも、多岐にわたる事象を深く感取し（感性）、空間芸術たる本質に精通し（悟性）、どう感じさせるか思考工夫を凝らす（理性）ということ。そして両領域とも、単に感性のみの教育・育成に走るのではなく、悟性（事象に対する本質的理解）・理性（本質的理解の上に成り立つ推論）との一体的教育・育成を目指す必要があるということ。
- ・あなればこうなる、こうすればあなる、と造形的に操作・思考...課題解決への妥当性な道筋を多角的に考えることは、造形上

のいわば論理性のようなものに相当するということ。そしてまた、これを造形的に考える力というのは、造形上のロジカルシンキングに相当するということ。論理というのはあらゆる学問のなかでも極めて重要な意味合いを持つが、こうしたものを決して軽んじない教育が必要であるということ。

- ・更には、古今東西を広く知り、常に自他を客観し、表現を考えていくということ。
- ・そして今日の美術教育の中で具象的表現の教育が果たしうることは、諸科学、或いは全人的人間形成の蜜月同化を図り、一層の展開を得ること。

本研究から学会論文が2編掲載されたが、この研究を通し、当領域の教科内容学的基礎・基本・体系や、教育的価値・位置づけ等が具体的な言葉となって一層明らかになってきた。また、実践した実験授業の有効性の調査を目的とした無記名のアンケートの内容と結果を以下に掲載しておく。

アンケート内容の概略

この授業が自分にとって有意義であったか

- 1 自分にとってその効果があったか
- 2 一般の人にも効果があると思うか
- 3 児童・生徒にとっても効果があると思うか
- 4 教員養成の学生にとって効果があると思うか

この実験授業群の効果を知る手掛かりとして設けた質問項目の、並びに -1～ -4 の項目について、5段階評価で受講生全体を集計すると、

	5 : 56% , 4 : 44% , 3 : 0% , 2 : 0% , 1 : 0%
-1	5 : 67% , 4 : 33% , 3 : 0% , 2 : 0% , 1 : 0%
-2	5 : 44% , 4 : 56% , 3 : 0% , 2 : 0% , 1 : 0%
-3	5 : 44% , 4 : 44% , 3 : 12% , 2 : 0% , 1 : 0%
-4	5 : 44% , 4 : 56% , 3 : 0% , 2 : 0% , 1 : 0%

という数字が出た(回答数9, 全受講生対象)。 -3を除くどの項目も良い、ないしは効果が期待できるという評価(5と4)が100%を満たした(-3は、88%が期待できるというものだった)。また素描に関して、受講前から非常に習熟度が高い受講生がいたが、彼に関しては受講前後で作品には大幅な変化は少なかったものの、本人が答えたアンケートでは 並びに -1～ -4 に至るまで全てが5という高い評価を得た。しかし授

業(9)では、もっと多くの時間を割くべきであった等、まだ改善点が残る状況だが、実験授業では絵画・彫塑両分野でこれまでに殆ど例のなかった内容の学習をバランス良くふんだんに盛り込むことができたと判断している。プレ・ポストテストの変化は8割程度の学生に塊の組立の認識の高まりが著しく見られた他、それぞれの内容理解が散見した感じで、殆どの学生に技能面の向上は見られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

前芝武史(ファースト・オーサー)、初田隆(セカンド・オーサー)、浅海真弓(サード・オーサー)、「教育学部美術科における絵画・彫塑領域横断的授業「具象表現」の内容構想とプレ実験授業について」、『大学美術教育学会誌 第45号』、大学美術教育学会、平成25年3月、PP.367-374

本論文の執筆分担について

初田隆(セカンド・オーサー) :

(1) p.368

(3) pp.368-369

(8) pp.371-372

浅海真弓(サード・オーサー) :

(4) pp.369-370

前芝武史(ファースト・オーサー) :

上記以外

前芝武史、「教員養成系大学美術科における絵画・彫塑領域横断的授業科目「具象表現」彫塑分野からの省察」、『大学美術教育学会誌 第46号』、大学美術教育学会、平成26年3月、PP.

[学会発表](計 0件)

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前芝武史 Takeshi MAESHIBA

(兵庫教育大学学校教育研究科准教授)

研究者番号：50403308

(2) 研究分担者

初田隆 Takashi HATSUDA

(兵庫教育大学学校教育研究科教授)

研究者番号：60273819

(3) 研究分担者

浅海真弓 Mayumi ASAUMI

(兵庫教育大学学校教育研究科准教授)

研究者番号：50533428